

## <滋賀×SDGs シンポジウム> 「北欧・幸福の社会モデル」に学ぶ（概要）

### ○ 開会挨拶

フレディ・スヴェイネ氏（駐日デンマーク王国大使）と三日月大造氏（滋賀県知事）が、これからの社会のあり方、持続可能な社会を代表するキーワードを、それぞれ3つずつ紹介

#### [三日月大造氏]

##### (1) 「10万」

今、琵琶湖には10万羽を超える水鳥がいる。また、琵琶湖のヨシでヨシ笛を作ることができる。水鳥たちと一緒に生きること。琵琶湖のヨシを大切にすること。この「共生」が幸せにとって大事と考えている。

##### (2) 「トゲ」

滋賀県を代表する世界的に有名な澤田真一さんの彫刻の作品の特徴は、たくさんのトゲにある。彼の作品が言葉や国境を越えて多くの人々の感動を生み、新たなコミュニケーションが生まれる。私たちは個性や多様性を大事にした滋賀にしたいし、そのことが、幸福や豊かさにつながる。

##### (3) 「coffee」

これはパッケージが coffee のようだが水草で作った肥料である。県内の建設会社が、琵琶湖の水草を堆肥化して有機の肥料として商品化したもので、社会課題をビジネスで解決するチャレンジが生まれている。大事にしたいキーワードは、地域にある資源をうまく使う「循環」である。

#### [フレディ・スヴェイネ氏]

##### (1) 「Soccer Ball」

サッカーボールはSDGsを表すものだ。つまり、SDGsはこのボールのように常に動き続けなければいけない。皆さんが責任を持って関与し、これから先をどうしていくかということを考えないといけない。

##### (2) 「Book of Songs」

デンマークの家庭では、歌の本が何世代にもわたって進化してきた。そして、コミュニティの聖書をつくってきた。SDGsに皆が関与するためには、このような共通のプラットフォームが必要だ。滋賀県でも知事が関与して、共通のプラットフォームをもとにして動かないといけない。

##### (3) 「And Wind」

SDGsの実現のために技術や革新が必要だ。クリーンなエネルギーを発電する風力発電機はこれまでもあった技術だが、1970年代に石油の代替手段として至った最も力強い答えである。これから先の時代には新しい技術や革新が必要だが、これが答えだと思う。

## ○ オープニングスピーチ

演題：「デンマークのSDGsによる社会変革」

講師：フレディ・スヴェイネ 氏

- ・デンマークの幸福に関しては日本でも多くの本が出版されるなど関心が高いが、小国であるデンマークを日本が真似をするのは難しいと言われる。しかし知事と市長が責任を持ってその気になれば可能なことだ。
- ・先ほどの風車の事例については、1970年代の初め、収穫機もトラックも使えない状況になり、農家は根本的な仕組みの変更に迫られた。当時、将来を見据えた政治家、科学者、そしてより重要なのは民間事業者が技術革新を考え、風車に行きついた。風車は日本とデンマークの協力を示す重要な一例である。日本では風車の数は多くないが、これから広がっていくであろう。費用が掛かるし環境への負荷はゼロではないが、課題の解決策の1つであり、象徴として皆がひらめきを得られるものだ。もう一度、発想を転換して技術革新を起こそう。風は常に吹いている。Win-WinのWinはWind（風）。デンマークでは非常に多くの電力を風から生み出して消費しており、火力発電より良いと思う。新しい技術ではなくても、歴史を遡って新しい技術として再転換することは可能だ。
- ・このSDGsサッカーボールは、国連に加盟する国々が決めた、より良い世界そして持続可能な世界をつくり出すために何が必要なのかを表す象徴である。SDGsの目標達成には、一人ひとりの関与が必要だ。知事や市長が滋賀県の問題を全て解決してくれると思うのではなく、皆さん自身も責任を取る必要があり、責任ある行動を取ることが重要だ。世界を変えるのは政治の力や国連の決定ではなく、一人ひとりの力である。SDGsは固定の目標ではない。常に転がし続ける必要がある。今日探せない答えも2年後には見つかるかもしれない。
- ・デンマークは世界一幸福な国とされている。なぜデンマーク人は幸せなのか。いつも幸せなわけではないが、幸せな国と思われたいと思っている。デンマークでは若い世代が思い入れを持つよう、幼い頃から例えば自分たちの両親、先生、社会に対して色々な疑問や質問を投げ掛け、関わることを重視している。デンマークの投票率は80%以上ある。変化を起こすためには思い入れが重要で、子供の頃からの教育が大事である。自分たち自身で将来を変えられると学ぶことが大事だと思う。
- ・もう1つ大事なことは、現在の技術にどのように適応し、技術を活用しているのかということだ。ただし、デジタル経済やデジタルな解決策は、プライバシーに関わる問題もある。私の個人的なことやいつもサッカーボールを持ち歩いていることは、SNSを見ると分かる。そしてこのサッカーボールを日本の政治家、東京都知事にも渡した。東京オリンピック・パラリンピックで使用されるサッカーボールをこのデザインにして欲しい。なぜなら、選手、観客、皆さんの思い入れにつながり、皆が関わる必要がある。そして皆が自分を越えた責任を取る必要があるというメッセージを伝えられるからだ。
- ・デンマークの事例が皆さんのヒントになればと思う。サステイニア（Sustainia）の話からも、SDGsの重要性だけではなく、代替方法を考えないといけないと理解してもらえと思う。そして、決断するためにも、今の安心な場所から一步踏み出さないといけない。
- ・私はアメリカ式のやり方も大好きだし、新幹線や飛行機をたくさん利用する。車はないが自転車を持っており、少しは貢献しているかもしれないが、代替手段を示さなければ人を説得することはできない。今日のシンポジウムや明日のワークショップを通じて滋賀県の皆さんと一緒に解決策を生み出す。そのために琵琶湖がプラットフォームとなり、食料、環境などの問題の解決策につながればと思う。今日から明日への新しい道を探していこう。
- ・今日、ご招待いただき感謝申し上げます。皆さんへのひらめきとして、このボールを知事にお渡ししたい。これで滋賀県を転がして欲しい。市長には風力発電機をお渡ししたい。いつも私はこれにひらめきをもらっていた。この風を琵琶湖の風につなげていただければと思う。

## ○ 基調講演

演題：「サステイニアの革新的取組事例」

講師：ラスムス・S. ピーダーセン 氏（サステイニア）

- ・私はサステイニアのCEO、シニアパートナーとしてサステナビリティについてアドバイスをしている。デジタルツールもあり、それを使って何か行動してもらおうとしている。今日は、なぜサステナビリティが正しく、すべきことか。どんな解決策があるか。どのように変化を成し遂げるか。この3つのことをお話したい。
- ・日本の皆さんはサステナビリティ、気候変動、平等性、社会性などの問題に対処されるのが相応しい。なぜなら、世界を見渡すと、日本の企業は長期ビジョンを掲げ実践している。いかに行動に移すかは、日本の企業が長けていると思う。
- ・サステイニアは、きちんと調査した事実に基づきストーリーを展開する会社である。大事な事は、事実であること、ストーリーがあること。そうでなければ誰も行動しない。2009年の創業後10年で50の研究発表を行い、1,000社に解決策を提供した。SNSのフォロワーは70,000人いる。
- ・サステイニアが誇るもう1つは、Global Opportunity Explorerというデジタルのエコシステムの解決策。世界中で見れるし、都市や企業および個人ごとにある。価格面、利便性で常にご利用いただけるものかを考えており、実際に見れば何かひらめきを感じると思う。
- ・サステイニアは毎年レポートを公表している。直近では新しい気候の展開について。その他、様々な情報、例えばどのような戦略、考え方、解決策があるかや、世界中の18,000人のリーダーの活動内容など。今後可能性がある市場や、サステナビリティの点から良い市場なども聞いており、サステナビリティを中心に企業を運営している。
- ・Global Opportunity Explorerにはデンマークだけで100の解決策がある。98の行政団体中、80の団体から抽出した。循環型のエコ経済からインフラまで様々な持続可能な取組がある。今日はその中からいくつか紹介する。
- ・1つめは循環型経済。デンマーク政府は新しい施策を発表した。デンマークは人口570万人の非常に小さな国だが、国土全体に解決策がある。行政を含めたくさんの発想と民間同士のパートナーシップによる投資が行われている。インフラ、循環型経済、シェアリング経済など12の分野があるが気候管理に関するものが多い。ではなぜ、サステナビリティが必要なのか。
- ・ノルウェーは、大きな石油輸出国だが、非常にサステナビリティを大切にしている国だ。友人のアセットマネージャーはサステナビリティへの投資を営んでいる。SDGsには12兆ドルの市場があるといわれている。
- ・次は幸せについて。デンマークは最も幸福な国のトップに常にランクされている。持続可能な社会は様々な意味で幸福な社会である。これまで集めた事例は、市民が参加できるもので、市民が参加することによって政府は強くなれる。つまり一緒にやることで幸せになれる。政治家に対する信頼もある。信頼は社会が持続可能になるための基礎である。また、自然に囲まれ緑にアクセスできるので幸福や生活の質を高めることができるし、自然環境とのつながりも強くなる。都市でのコミュニティ作りでも幸せを実感できる。
- ・C40のMark Wattsは、「持続可能な都市はマーケットをつくり出す。そして世界の大都市はサステナビリティの牽引力になり、変化をつくり出すことができる。政府や企業にできないことが都市レベルで可能になることがある」と言う。
- ・2019年のヨーロッパのグリーン首都に選ばれたオスロは大胆に変化してきた。車が入れないようにし、電気自動車を使用させる。公共交通機関の値下げ、生物多様性、市民の健康などに力を入れている。2050年までにカーボンニュートラルを達成する目標を掲げている。もしオスロに関心があれば、Global Opportunity Explorerでオスロと入力すれば、様々な持続可能な解決策をご覧いただける。

- ・デンマークには県に相当する5つの地域があり、医療制度や気候変動対応など、非常に緊密な連携をとっている。もし海面が上昇したら、水はどこにでも流れていく。日本でも市町村、都道府県は独立した自治体だが連携をとって欲しい。
- ・ニューヨークとコペンハーゲンには連携している。ニューヨークはコペンハーゲンから集中豪雨の対策を学び、コペンハーゲンはニューヨークから沿岸の降水の事例から学んでいる。北欧諸国は世界中で自分たちのやり方を伝え、そして自分たちも世界中の他国から学ぼうとしている。
- ・次にライフスタイルについて。コペンハーゲンの隣にあるフレズレクスベア市では、交換や貸し借りが無料で出来る“交換小屋”を実験した。市民は消費やごみを減らすため、そして住宅機構は地域や住民が消費を減らすため何が出来るか考えてきた。世界中の問題を解決するには至らないが、使い捨て文化を変えようとする1つの事例である。また、フレズレクスベア市では、環境アンバサダーの取組をつくった。先進的な取組を行う人々がお互いに刺激し合い、取組の輪を広げている。市役所ではなく市民が運営し、自分たちでリーダーシップを発揮し責任を取ることが重要だ。
- ・コペンハーゲンの運河では誰にでも無料でカヤックを貸出している。レジャーを楽しみながらプラスチックなどのごみを集めてもらっている。市長も参加している。
- ・同じくコペンハーゲンにあるデンマークで初めての屋上農場は、自然と農業を都市に持ってくる取組である。40家族が卵、蜂蜜、野菜を生産し、教育活動を通じた収益でレストランを運営して費用を賄っており、年間13,000人が訪れる。
- ・2013年12月、豪雨に見舞われ介護施設が550万リットルの水に浸水したロースビューでは、浸水被害の再発防止のため、雨水を管理する娯楽施設シーパークをつくった。豪雨の際に雨水を貯める施設を持つ。もともとは雨水を排水するための貯水池をつくる予定であったが、それだけではなくバレーコートやトレーニング施設などスポーツを楽しんだり公園を楽しんだりする娯楽施設となった。これは市民が参加した成功の事例である。
- ・次にビジネスだが、事業や行政に非常に良い取組事例がたくさんある。
- ・アレズ市では、温暖化ガスの40%が事業によって出ているため、50社が官民でつくったカーボン20ネットワークに参加し、官民の協力のサステナビリティ、CO2排出削減、循環型経済を目指した。
- ・グルンドフォス社の排水ポンプの事例。バイオブースターといい、排水以上の働きがあり水生環境の保全も行っている。フィルタがバクテリアを排水から除去し再生可能な水にして灌漑などに使う。
- ・同じくグルンドフォス社の地域暖房の事例。工場の機械熱を冷却する際に温まった地下水をポンプを使って地域暖房に再利用しており、熱に関する支出の15%が削減できている。
- ・ビヨンドコーヒー社の事例。コーヒーの出し殻を使って食用のマッシュルームを育てるキット。コーヒーを淹れる際、豆の0.2%を使い、残りは捨てられる。これを何かに使い廃棄物を削減する目的で考えられたもの。市場規模は小さいが伸びている。従来の発想を超えて何が出来るか考えて欲しくてこの事例を紹介した。
- ・DNV GLの事例。この企業は創業して10年経過したが素晴らしい変貌を遂げた持続可能な企業である。気候変動問題は深刻になっており、デジタルマッピングツールを用い、洪水、地震などの天災から地域を守ろうとしている。緊急管理体制は非常に重要で、情報を使いリアルタイムで使われないといけない。テストは良好で、フィリピンでも導入が検討されている。
- ・次にガバナンスについて。ヴァイレでは家庭用ごみのリサイクルで新しい枠組みが考えられ、結果は良好だ。市民と行政が一緒になり食糧廃棄物の81%を分別している。また有機廃棄物や紙・段ボール、プラスチックの回収が増えた。
- ・ユトランド半島北部のオールボーではサーキュラーユトランドというプログラムがある。革新的なプロジェクトが多々あり、循環経済や資源の再利用に焦点を当てている。年齢関係なく市民が関与する様々な率先事例があり大小企業も関わっている。グリーン調達政策は学校でも新しい標準ができた。家具が古くなったら捨てるのではなく新しいものと手直ししたものを教室で使うようになった。これによりCO2の排出が57,000t削減された。

- ・コペンハーゲンでは自転車に乗る人が多く、新しい交通管理基盤をつくり、気候に配慮した都市になろうとしている。賢い輸送システムによって現在の交通の状態が分かり、必要な介入を行うことで移動の効率性がある。公共輸送を使う人、自転車を使う人の双方が分かり、基盤とつなぐことで移動時間の10%が削減できる。バスでも移動時間の20%が削減できる。
- ・ユトランド半島にあるデンマーク第二の都市オーフスにはリハビリテーションセンターが周りにある公園をつくった。豪雨から守る目的もある。100年前にできた病院を使った革新的な試みである。
- ・郊外にあるレンヴィという漁村は最も脆弱な市かもしれない。北海に面しており周りに水があるため、未来のための様々なプロジェクトが考えられた。海面の上昇、豪雨、地盤沈下などに適応するためである。これらの課題に包括的に対処するため行政として動的気候適応モデルによって地図をつくる、あるいは衛星監視などを使って地盤沈下等に対応するモデルをつくった。
- ・ユトランド半島にあるスカナボーでは透過性のある道路をつくった。雨水がアスファルトを透過し、近くの公園に流す。膜を張っており、汚水と地下水が混ざらないようにしている。貯水槽があり大量の表層水を貯めることができるので、100年に一度くらいの洪水があっても対処できる。
- ・デンマーク中央にあるヘデンステッドにある道の事例。気候道路と呼ばれ雨水など水の熱を利用し地熱暖房として近くの公的機関に使っている。ビジネス、大学、地域、行政が一緒につくったもので、水がアスファルトを透過し貯水槽に流される。年間凡そ75,000kWを発電している。
- ・ここまで実践的な解決策を紹介してきた。全部で1,000の事例がある。ではどのように実現すれば良いか、サステナビリティとどう付き合っていけば良いか。
- ・サステイニアは想像することが意識改革に非常に重要と考えており、世界中の様々な都市の戦略をつくり出している。例えばコペンハーゲンでは市民、労働者、政治家と一緒に2025年のビジョンをつくり、市民に発刊物として配布した。個別の解決策や技術も重要だが一層の変革に向けてはビジョンを示し出来るだけ多くの関係者に関わってもらう必要がある。皆それぞれの暮らしがあるので、他人の考え方を取り入れなければ実現可能な解決策は見えてこない。
- ・また、サステイニアは意識改革の基礎となるものを考えた。未来を塗り替えるための意識改革に必要な考えの変え方を10個紹介する。決して簡単ではないことだが、頭に留めておいて欲しい。

### 1. 恐れから信頼へ

どうすれば自分たちが恐れることから信頼へ変えることができるか。例えば、傾聴し、予測可能性を高めること。これは長期的な計画が重要ということにつながる。予測可能性を高めることで安心感が生まれ他者への信頼が醸成される。そして変化の意思を育てる。

### 2. リスクからチャンスへ

これはサステイニアの根本にある考えである。常に悪い結果を考えるリスクからチャンスへ考えを変えることが必要だ。もちろん現実的である必要はあるが、楽観主義的に必ずできると考えることだ。そうすることで精力的な考え方、そしてより高い想像力を持つことができる。リスクには変化のための種がたくさん詰まっている。変わらなければどうなるか考え、暗闇の中から明かりを見つけ出そう。

### 3. 無関心からエンパワーメントへ

デンマークでは、4年ごとの国政選挙、ヨーロッパ議会選挙、自治体選挙など、様々な選挙の機会があり、場合によっては選挙と選挙の間に思い入れや関わりが弱まってしまうこともあると思う。そのため、市民を無関心からエンパワーメントの状態に変えていく必要がある。

### 4. 疎外から包摂へ

変化が起きていない理由の1つ。社会的なつながりを強め、お互いを統合するために技術を使う。アプリやソフトウェアは社会全体に役立つものである必要がある。皆さんに通勤電車やコーヒーショップで隣の人に話しかけて欲しい。「何をしていますか」「何に情熱を持っていますか」と。ここにいる200人が明日から実践したら何かが変わるかもしれない。

### 5. 断片化した情報から魅力あるストーリーへ

これまで事実に基づくことが大事だと話してきたが、私はストーリーの力も信じており、断片化した情報から魅力あるストーリーを生み出したい。データからどのようなストーリーがあるか。人々を結び、未来に向かうための一歩を探したい。

#### 6. 真実を踏まえて新たな啓発

感覚ではなく根拠に基づいて決定する、良い知らせと悪い知らせを同等に扱うことが重要だ。真実は恥ずかしいことではない。不実の方が恥ずべきことである。これまで不十分であったことや、出来ていないこと、競合企業や隣の地域よりうまくいっていないことをごまかすのではなく認め、真実に基づいて一歩踏み出すことが大事だ。フェイクニュースが溢れている時代だからこそ、真実や本質を重視しなければならない。

#### 7. 思慮のない必需品から持続可能な必需品へ

私は日本人の考え方が好きだ。非常に繊細で細部にこだわるどころ、控えめで中庸な考え方。例えば、新しいスマートフォンが欲しいが本当に必要か考えるところ。新しいキッチンを購入する際、10年使用できるものより少し高額だが30年使用できるものだと、3回買い替えるより低額で済むと考えて欲しい。何を購入するか、なぜ必要なのかを考え、購入する際は持続可能な選択をして欲しい。自身の実践が他人にも影響を与えようと思う。

#### 8. 直線的な革新から指数関数的な革新へ

市民が参加することを考えたら、先導をどのように伝播させるか常に考えて欲しい。AからBだけでなく、複数に辿り着くようにする。こうした指数関数的な変革をつくり出すことで持続可能な投資をさせ、利用しやすくして資源の消費を減らすことができる。

#### 9. 利益のための利益から人生のための利益へ

持続可能な投資を支援し社会貢献活動を促進する。近江商人の「三方よし」のように、取引には3者にとって良いことをすべきとの考え方があり、それに似ている。

#### 10. 絶え間ない関与を

やると決めたらやり抜かないといけない。2030年まであと4,000日。なぜ持続可能であるべきか。それは正しく、賢明であるからだ。そして非常に大きな経済的可能性があり、地球に良いことができる。では何をすべきか。今すぐ使える1,000以上の解決策が既に存在している。そしてどのように、どうやって意識改革をすべきかについてお話した。ありがとうございました。

## ○ 講演

演題：「デジタル社会と市民参加」

講師：ミケール・クレマー 氏（サステイニア）

- ・なぜデンマーク人は幸福なのか、どのようにデジタルサービスを使って幸福度を高めているか。私はサステイニアでデジタルデザイン部門の長を務めており、市民や企業が使うたくさんのサービスの中からいくつかを紹介する。
- ・“Easy ID”というカードを85%の市民が使用している。ログインして行政サービスや銀行のサービスを受けることができる。パスワードとコードを入力して使うが、2018年にアプリケーションができ、カードも不要となった。
- ・“Life in denmark.dk”という市民ポータルサイトには英語版、デンマーク語版がある。2008年頃に始まったサービスで、ほとんどの行政サービスが提供されている。引っ越しの際は住所を入力すれば届出が完了し、納税の際はリンク先のTAX.DKのサイトを訪問すれば良い。非常に簡単で時間の節約ができる。今回の来日の際、パスポートの申請が必要だったので、このサイトで手続きをした。93%の顧客が満足しているが、なぜか。それは、サイトの開発に顧客も関与したからだ。私も「このサービスの利用は可能か」といったインタビューを受けた。そうしたことに長い時間を掛けて作ったので、皆が使える満足率の高いものができ上がった。
- ・“Mobile pay”はデンマークでつくられたアプリケーションであり利用率は70%。電話番号を入力すれば非常に簡単に取引ができるもので、クレジットカードが不要になった。高齢者でも使え、男女とも70~75歳の方の利用率は3%から33%に上がった。なぜ上がったかということ、子どもや孫と一緒に買い物に行き使方を教えているから。
- ・“Too Good To Go”デンマークでも食品ロスの問題があり、5人の若者がこの問題に対処するため、2015年にサービスを開始した。このサービスは、パン屋やレストランが売れ残りを値引きして1日の終わりに売ることができる。若者は値引き後の価格で食事ができる。これで1,100万食のロスが削減されている。このサービスの開始後、スーパーマーケットでも食品の値引き販売をするようになった。かつては廃棄していたが、スーパーマーケットの考え方が変わった。少しでも売上げが上がり、廃棄物が減る。このアプリには16,000のロコミがついており本当にすごいことだ。いくつか見てみると、捨てられるはずだった食べ物を買って、社会に貢献出来たなど前向きな感想で、皆を幸せにしている。食品ロスの削減と節約ができ、それをSNSで発信する。このアプリの開発者はこれを社会現象にして世界に伝播させ、そして幸せを生み出そうとしている。
- ・サステイニアは様々な方にGlobal Opportunity Explorerに参加してもらい、コンサルティングやストーリーづくりを行おうとしている。問題があれば、その解決策を探り、Global Opportunity Explorerを通じてコミュニケーションをとろうとしている。サステイニアはこれまでに1,000の解決策を集めたが、2019年は世界中の課題解決につなげていきたい。そのため、より多くの方に参加してもらう必要があり、皆さんが抱える課題もサステイニアとつながればグローバルで解決できるかもしれない。サステイニアのホームページから1,000の解決策にアクセスできるし、より複雑な解決策が必要なものもあると思う。2020年の目標を達成するまで4,000日しかないので、課題解決を加速化するため、例えば課題を入力すると解決策が出てくるなどAIなどを使っていきたい。1,000の解決策の中に日本のものはほとんどないので、皆さんの解決策を提供してもらいたい。
- ・個人、企業、行政、社会などが抱える課題はまだ多く、解決していく必要がある。そのため、サステイニアは、解決策だけでなく課題も検索できるように“Challenges”というものを取り入れようとしている。解決すべき課題はたくさんあるが時間が足りないので、機械の力を取り入れたい。
- ・実際にサステイニアはどのように課題を解決しているのか。Global Opportunity Explorerには1,000の解決策があり、適用できるものがあるかもしれないし、課題を全ては解決できないが部分的に適用できるかもしれない。そして、次の段階として、解決策に手を加えることで解決できない

か、全く新しい解決策を創造するか。これが一番難しいが、4,000日しかないので世界を救う解決策を考えていく必要がある。

- 滋賀県の問題について、いくつか取上げ、先ほどの適用、適応、創造の観点からアイデアを示したい。まず“急進するICT技術をいかに都市計画に適用していくのか、建物や道路を改善すれば良いか、人々の幸福に活かすか”
- “ICT”をGlobal Opportunity Explorerで検索したら、“Geotab Canada”が出てきた。
- “Geotab Canada”は、10万台の車に計測装置を取り付け、車が通る道に沿って様々なデータを測っており、例えば交通渋滞、大気汚染、自転車にとっての危険場所などのデータを集めることができる。滋賀でも適用すれば、1つの解決策として都市計画に活用できるのではないか。もちろんそのまま活用するのではなく、少し手を加える必要はある。“Geotab Canada”と企業が連携し、既にある1,000以上の解決策を使って、滋賀で一番良いやり方を探ることができる。
- 次に、“行政はいかに高齢社会に対応すべきか”をGlobal Opportunity Explorerで検索したところ、アテネのデジタルな解決策が出てきた。酷暑の際、危険地域にいる高齢者をはじめ市民にメールで通知が届き、屋外なら例えば噴水に近いところなど熱中症から身を守れる場所を知らせてくれる。滋賀でも非常に暑い日があると思うし、将来的には温暖化によってもっと暑くなる可能性があり、活用できるのではないか。また企業にとってもビジネスチャンスになる。
- 次に、“少子化の解決策”で、非常に難しい問題だ。今ある1,000の事例では解決策が見つからなかった。“Challenges”に上げてもらうと様々な大学や先進的な企業の考え方を集められるが、質問の仕方をきちんとすべきだ。「なぜ子どもが増えないのか」と聞いても、いらないかもしれないし、結婚しないとなかなか子どもが生まれない。ではどうすべきかを考えると意識改革につながるかもしれない。例えばもっと緑が必要とか、人と人が出会う場所をつくるとか、これから親になる人が滋賀に魅力を感じられるような遊び場をつくったり、暮らしやすい場所にしたりするなど。それでも解決策を出すのは難しく、解決には時間が掛かると思う。親になることが幸せという未来を描けるような方策、アイデアはあるが答えはまだない。この問題は世界的に一番大事だと思う。とても大きく時間が掛かる問題だ。
- “どのように女性の平等を実現するか、女性のエンパワーメントを行うのか” デンマークでも時間が掛かったし、日本でも掛かると思う。ノルウェーのビジネススクールで女性の社会的平等と活躍に関する研究を行っており、様々なアイデアはGlobal Opportunity Explorerに載っている。ひらめきを得られる内容だが、より多くの問題と解決策があり、この解決策だけで良いというものではない。対話型である必要があり、また、活躍している女性のストーリーを広める、平等に扱うといったことが必要だ。Global Opportunity Explorerを通じて課題を提案し解決する、様々な人の知見を集めることで解決を加速させる。そのためにはパートナーがとても大事だ。
- Global Opportunity Explorerには1,000の課題と解決策がある。世界中から様々な人が参加して、これを解決していく“Challenges”を共有して解決するのはとても大事なことでもっともっと広げていきたい。ありがとうございました。



## ○ パネルディスカッション

テーマ：「滋賀、日本でのSDGsイノベーション推進のために」

モデレーター：ピーター・D. ピーダーセン 氏

((一社)NELIS-次世代リーダーのグローバルネットワーク共同代表、リーダーシップ・アカデミー TAFL 代表)

パネリスト：フレディ・スヴェイネ 氏、ラスムス・S. ピーダーセン 氏

ミケール・クレマー 氏、越 直美 氏 (大津市長)、三日月 大造 氏

### 1. 北欧の社会モデル - どこにその魅力や強みがあるか。日本としても学べるところはあるか。

[どのような社会設計で幸福度の高い社会を実現しているか]

- ・デンマークでは市民が政治や行政を信頼してくれている。信頼があるから未来や機会がある。
- ・物事を別々に考えるのではなく、全てのはつながっており、全体として考える。包括的に考えることでより一層問題が難しくなるとともに単純にもなるし、より大きな問題に焦点を当てることで1つひとつの小さな問題に対する道筋が見えてくる。

[日本としても学べるところはあるか]

- ・市民や事業者が参加したまちづくりをしていることが印象に残った。これまでの日本は人口増加を前提とした行政主体の大きなまちづくりであったが、人口減少時代のまちづくりへの転換をしていかなければならない。
- ・行政が公共事業としてまちづくりを行うと様々な意見を聞き、良くないことを全部削った結果、誰も良いと思わないものができあがる。そのため、市民や民間の方が面白いまちづくりをできるように、行政がスペースを開放していくよう方向転換したい。

#### 【参加者への質問と結果】

Q1：日々の暮らしの「幸福度」を教えてください。(回答は1つ) 回答数 140

- (1) 非常に高い幸福度や生活の充実感を味わっている：6%
- (2) 幸福度は、そこそこ感じて生きている：44%
- (3) 日本はポテンシャルがいっぱいあるのに、いま一つ幸福度を実感できない社会になっている：49%
- (4) いまの暮らしでは、ほとんど幸福度を実感することができない：1%

[アンケート結果に対するコメント]

- ・(3)が多いのは制度の問題ではないか。人それぞれ幸福に対する考え方は異なるが、自分がしたい生き方をできていることが幸福につながると思う。社会や会社の制度のために希望と異なることが(3)が多い原因ではないか。
- ・日本中どこでも同じような結果になるのではないか。ただこの結果を悲観的に見るのではなく、まだまだ潜在力があって変えていけると思いたい。デンマークの消費税率は25%で、高いと言われるが、税金は社会に対する投資で、大事な事はリターンがあること。そのため、やり方を変えれば良いが、やはり信頼の問題と思う。
- ・それぞれ、自分の人生と仲間の人生があり、変えていく責任がある。幸せになりたいならその変化を自分たちで起こそう。

[質疑応答]

質問：デンマークではどのように政策に対する合意形成をおこなっているのか。

回答：・意見の相違を補完するための対話を行い、折り合いをつけている。誰かが、「自分が決める」と立ち上がったら、その10倍の人数で引き止めるだろう。対話によって解決策を探り、譲り合おうとする平等な社会だと思う。

- ・SDGs に関しては、共通言語を持ち、スピード感が重要だという 2030 年までの活動の合意ができており素晴らしいことだ。やり方は異なるかもしれないが、行動しないといけないことは一致しているので、政治的な合意形成ができるし、妥協点を探ることもできる。
- ・日本でも雇用者と従業員が何世代もかけてより良い社会、より良い生活のために共通の考え方を築き上げてきた。合意形成をはかる土台は日本にもあると思う。

質問：デンマークで今と同じ質問をしたらどういうニュアンスになるか。

回答：・恐らく、より良くしようと言うだろう。税金は高いが無料で十分な教育、社会保障、医療がある。子どもたちのためだと答えるだろう。

- ・デンマークは幸福な国だ。仕事場に自転車で行くし道路も良い。私の仕事を尊重してくれるし、毎朝挨拶もする。給与も良い。私は幸福だ。そしてもっと良くなると思う。
- ・誰かとつながりたいと思ったら、自己紹介をしてはどうか。そうすると、人から何か学ぶことができるし成長もできる。スマートフォンの画面だけ見ているのは成長しない。

質問：滋賀県は村が非常に特異な発達をしたところと思う。つながりを持つために村的な組織を大事にし、例えば SDGs の 17 ゴールに村を当てはめたらほとんど全て解決できると思う。滋賀県にはそういう土壌があることをもう少し考えて欲しい。また、デンマークでは村組織のようなものがどのように機能しているのか。

回答：・駐デンマーク英国大使が、デンマーク社会の面白いところとして、村社会の良さをそのまま残して近代社会になった珍しい国だと言った。

- ・村は小さく、関係が近いからこそ信頼がある。単に税金を払うだけでなく使い道を自分たちで決めているということがある。市のように大きくなると、税金の使い道を市が勝手に決めていると思われ、信頼がないというより無関心の方が大きい。
- ・近所の人たちの自治能力が持続可能や幸せに貢献すると思う。そうしたものの役割を見直して充実させることが重要だ。
- ・10 年前と今の日本に大きな違いを感じる。地域社会は非常に大きなエネルギーを持ち、様々なことに関与し大きな可能性がある。地域社会を大事にすると日本の将来は安全になり地域社会も助かると思う。そうして持続可能な解決が待っている。SDGs は皆への贈物だ。大切な枠組みが合って、それを使った有形の解決策が出てくると思う。

## 2. SDGs 実践に向けた行政、企業、市民参加での取組 - 北欧と滋賀の具体例

### 【参加者への質問と結果】

Q2：日本社会の「良さ・魅力」を最もよく表す言葉を選択肢の中から 3 つ選んでください 回答数 145

- (1) 経済力がある：17%
- (2) 政治が開かれていて、市民参加が活発である：1%
- (3) 市民と行政や政治家の距離は短く、信頼関係がある：1%
- (4) 自然が豊かで、美しい：78%
- (5) 長い歴史、文化、伝統がある：83%
- (6) 日本人は勤勉で、そのまじめな国民性が社会を強くしている：43%
- (7) 食文化など背景に、長寿国である：54%

### 〔アンケートの結果に対するコメント〕

- ・経済は社会のためにある、経済は人のためにあるというのが 20 世紀の社会民主主義の基本理

念。強い社会には強い経済が生まれる。市民や暮らしのために経済があると言われてきて、北欧の社会モデルが成り立ったが、日本では日本経済や株価がどうなっているかばかりがニュースで流れている。日本社会、日本文化という言葉よりはるかに日本経済が出てくる。経済は何のためにあるのかの議論はなく、日本経済は強い、政府は強い経済力と言うが、日本の魅力の一要因にすぎない。

- ・デンマークでは(2)が1%ということはないだろう。「オープンさ＝幸せ」で、オープンでないとつながることもできない。つながりは外向きにも内向きにもオープンでないと達成できないので私たちにとっての課題である。
- ・皆さんが参加したいと思っているか知りたい。今は活発でなくても参加したいと思っているのか。今既に人生に必要なたくさんのお持ちだし資産もある。変革の世界の力になり得ると思う。これまでに様々な技術を作られたので、それを幸せの源泉にすることもできる。今後10年は、より開かれた社会をキーワードに進んでどうか。
- ・皆さんは既に全てお持ちだ。素晴らしい歴史、料理、強い社会。そのため、未来に対する信頼を醸成する必要がある。外からの大きなショックを待つのではなく、もっと未来に関心や思い入れを持ち新しい世界に一步踏み出せば、素晴らしい一步になると思う。日本の企業の中には自分たちをもっとオープンにしたいという気持ちを感じられる。先見性をもった政治家と皆さん一人ひとりが行動すれば、そして成熟があれば達成できるので諦めないで欲しい。信頼をつくって欲しい。自分を信頼できなければ、誰かと一緒に信頼をつくりあげて自分を変える、社会を変える。日本は諦めてはいけない。
- ・選択肢にない「安全」が一番良いことと思う。日本人は皆当たり前のようにあると思っているが。また、(5)(4)(7)は皆が満足している一方、変える必要がない気持ちもあると思う。頑張っただけで変えようと思うまでの不満ではないので、無関心とか現状が変わることが良くないといったことがあるかもしれない。
- ・国や地域には一定の力があると思う。資産はある。ただ、資産があるから、様々なものをたくさん持っているから幸せか、豊かかと問われるとそうではない人が多い。やはり自分で決めている、一緒に決めている満足感がないからと思う。地域の未来をどうすべきか、よりオープンに情報共有して一緒に考えて決めるプロセスが大事だ。

#### 〔滋賀での「SDGs イノベーション」の事例〕

- ・今日のシンポジウムは土曜日に県庁での開催となったが、たくさんの方が参加された。これからの未来づくりのきっかけとして力をもらった。
- ・地域のエネルギーを支援するためのグリーンボンドをつくり、新たな取組を試行している企業や、単なるお菓子販売だけではなく、どのような土から、どのような原料からつくられているかを実際に消費者と共有しながらビジネスをしている企業がある。
- ・こうした滋賀で生まれつつあるもの、そして皆さんと一緒に考えつつあるプラットフォームを増やしていくことによって変革の中心になっていきたい。

#### 〔質疑応答〕

質問：日本の若者は、恐らく自分たちだけが世界中で幸せでないのに、自分たちだけが幸せになることに非常に強い抵抗があると思う。今日の文脈の中でどのように整理すれば良いか。

回答：・責任を取るということを子ども達に伝えていく必要があると思う。コミュニケーションを取れば良いだけの製品をなぜ3年ごとに買い替えないといけないか。新しいバージョンで200もの特徴が必要だろうか。

- ・何度も何度も製品を買い替えることに消費者が批判的な目を持つようになると思う。素晴らしい製品でも、そのような製品を販売する企業は批判を受けると思う。

質問：本気で滋賀でSDGsを実践するための手段は何か。今の滋賀県の姿勢や取組はどうか。

回答：・知ることと学ぶことは、変わること、変えることにつながると思う。もちろん変わるために、動くことにもつながると思う。そのため、出来るだけ早く、未来を見通して、世界で起こっていることを知ること、学ぶことが大事だ。

- ・滋賀には「うみのこ」という環境学習船がある。この仕組みをさらに充実させ、現在行っている琵琶湖の水やプランクトンを見るだけでなく、世界で起こっていることなどを紹介し、子どもたちの想像を膨らますようなプログラムを開発する必要がある。そのようなことから始めたい。
- ・市民とごみの量を減らす取組を行っており、SDGsの紙袋をつくり分別を徹底するなどした結果、10%程度減少した。これは一人ひとりが日々できることだ。
- ・SDGsの取組は若者が参加しやすいと思う。これまでの市民活動は高齢の方が活発だが、SDGsの枠組みを使うことで若者が様々なやり方で参加できるようになった。

質問：持続可能な製品は高額だが、デンマークではどのように売られるのか。ビジネスとして利益を上げるのか。

回答：・消費者は考えながら選択すると思うが、若い世代の70%以上が持続可能で透明性のある製品なら購入すると言っている。こうした考えは広がっており、持続可能な製品だったらお金を出す。企業の課題は、「これは持続可能な製品だ」というだけでなく、消費者向けにストーリーを語らないといけない。

- ・昨日、ラ・コリーナに行った。素晴らしい製品、たくさんのストーリーがあったが、もっと語ることがあると思う。例えば持続可能なものから出来ている包装もそうだとと言えるし、再利用できる廃棄物のことも。製品に紐づく様々な話を消費者に届けることが出来ると思う。持続可能な製品だったらもっとお金を出す。そうすることでまた新たなストーリーが出来る。そして市場でそういった話が広がっていくと思う。
- ・滋賀では琵琶湖を汚さないため農薬を使わない環境にやさしい農業に取り組んでいる。この魚の卵を産む場所「魚のゆりかご水田」の取組のストーリーを消費者に伝えることで、持続可能で環境に配慮してつくったお米を少し高くても買ってもらえる。まだ十分ではないが広がりつつある。買うことと食べることも社会を変えていくことにつながると思う。
- ・一方で、持続可能な製品だったら高くても良いのではなく、企業は、掛かる原価、どれくらい廃棄物が排除できるかを考えないといけない。そうでないと地域や社会に与える損害が分からない。

質問：デンマークでSDGsや社会の変革に関する教育、学校の取組はどのようなものがあるか。

回答：・例えば、SDGsについてどう思うか、ゲームやクイズを使って生徒に意見を尋ねることを通じて教える。そして家族でそのゲームをもとに会話を続けることができる。

- ・学校の教育システムのどの段階にいても子どもには質問すること、興味を持つことを教えている。これは未来に責任を持つことに直結すると思う。若者に参加してもらおうと思うなら、立ち上がって質問を聞くことが唯一の方法と思う。

質問：イベントなどでもっと質問が出るような仕掛けや、教育の中に組み込むにはどうすれば良いか。

回答：・大事な事は、学校で教えてもらうことだけではなく、自分で疑問に持つことと何か行動することと思う。例えば、学校で自分たちで野菜をつくって食べるとか、街のごみを拾

- ったりキャップを集めて寄付したりとか。
- ・デンマークのように幼児期だけでなく成人期にも地域で学ぶ場所があることは重要だと思う。滋賀でも幼児期から遊びの中で学べる仕組みの1つとして「森のようちえん」を広げていくとか、小中高のそれぞれの段階で、それぞれのテーマ、クラスで疑問をぶつけ合うような場をつくっていききたいと思う。

### 3. 滋賀において、2030年を見据え、さらにSDGsの実践を核とした暮らし、ビジネス、行政のイノベーションを進めるとしたら、どのような取組が必要か。あるいは、滋賀 - 北欧間でどのような連携ができるか。

#### 【参加者への質問と結果】

Q3：滋賀・北欧間の協働が滋賀で進むとしたら、どのようなことに期待しますか。下記の選択肢から2つを選んでください 回答数146

- (1) 市民参加型の開かれた社会の在り方について：40%
- (2) SDGsなど社会イノベーションをどのようにもっと進められるかについて：34%
- (3) 福祉や教育のモデルについて：40%
- (4) 企業・事業者がSDGsにどのように取り組めるかについて：32%
- (5) 幸福度を高める施策、政策、取組の具体例について：47%

#### 【日本と北欧間の連携・競争について】

- ・デンマークは日本よりオープンかもしれないが、もっとオープンになりたいと思っている。先ほどのアンケートでは日本は1%だったということは大きな変化を起こせるということだ。必ず10%にはできるし、そうなれば10倍良くなるので、大きなインパクトがある。
- ・政府をどのようにオープンにすれば良いか。例えば、先ほど琵琶湖の環境学習船の話があったが、それを子どもだけでなく市民にも参加してもらえばどうか。SDGsのイベントなどをしてはどうか。あるいはビジネスマンにも乗ってもらい、市民との協働を考えてもらうとか。世界中で例のない新しい取組なのでニュースになると思う。
- ・34万人の市民や134万人の県民に3年間に一度、必ず乗船してもらい、ビジネスマン、子ども、市民が話し合いをする。新しいSDGsのフェスティバルとして。数隻の船がありボランティアスタッフなどを募れば実現可能だ。

#### 【アンケートの結果に対するコメント】

- ・(1)の市民参加型の開かれた社会の在り方に関して、市民と職員が一緒に考えて仕事をするオープンな市役所を目指し、市役所の一部を町家に移転することを計画している。サステニアの二人から、市長もオープンな場所でミーティングすればどうかとアイデアをもらったので、リモート市長室のようなものを考えたい。

#### 【滋賀でのSDGs実践における悩みの種とは】

- ・まだまだSDGsのことを知られていないことが課題と考えていたが、このシンポジウムを通じて、皆さんの関心が高いし、発信の仕方によって十分皆で一緒に考えていけると実感した。
- ・シンポジウムでの質疑の方法もICT技術によって改善されたし、これからの時代はICT技術を使って社会的課題を解決するアイデアを世界中から募り、実行する段階に入っていけないといけない。そのため、世論を形成していくプロセスをつくっていききたい。

#### 〔質疑応答〕

質問：・デンマークで 2025 年の姿を描いた時、皆の異なる思いをどのようにとりまとめたのか。

回答：・まずは枠組みを示すことだ。それが共通言語となる SDGs の 17 ゴールだから、皆が理解できる。それをもとに、国、市、企業、個人、子どもといった画家が色付けしていく。

- ・どのように未来を描き直すか。やはり暮らしに近いような訴え方が必要だ。滋賀で SDGs のアプリをつくって情報発信するという提案があるが、その時も国連的目線ではなく、暮らしの中でどのように取り入れるとか、一主婦が実践できる SDGs とは何か、子どもとどのような対話ができるかなど非常に身近な内容で発信すべきである。

#### 4. さいごに

- ・オープンガバメントに向けての取組として、市役所がオープンになるために町家に行って、市民の話を聞くなどしたい。また、様々な行政手続きを役所に行かなくてもできるよう、デジタルで、オンラインでできるようになれば良いと思う。自分たちもオンラインでつながれば、役所の建物自体の意味が無くなってくる。事務仕事は機械にやってもらい、私たちは出掛けていくなどやり方を変えたい。
- ・他人に未来をつくってもらうのではなく、責任を持って自分たちで、そして友人、家族、知事、市長とつながり、未来を描こうと言いたい。デンマークを真似するのではなく、何かを感じて自分たちで作り出して欲しい。デンマークも日本の皆さんから学びたいと思う。どのように変わったのか、また皆さんから話を聞きたい。
- ・何かを今日、始めるのであれば、皆さんは 1 日早く始められる。明日だったら 1 日遅くなってしまう。今から始めよう。
- ・2030 年まであと 4,000 日ということを絶えず意識していることが印象的であった。2030 年を漠然ととらえるのではなく、明確にターゲットを持って着実に一歩ずつつくっていききたい。